



小菅優 (d)、シェレンベルガー/カメラータ・ザルツブルク



フロムシュテット/バンベルク



幸田浩子 (S)、河野克典 (R)、宮本文昭/東京シティ・フィル



コジャ・ワン (d)、マイケル・ティルソン・トマス/サンフランシスコ

カメラータ・ザルツブルク & 小菅優 p

11月10日・すみだトリフォニーホール ●ハンス・エリック・シェレンベルガー(指揮) ●モーツァルト「ピアノ協奏曲第22番」(同第24番)「交響曲第39番」小菅優のピアノとシェレンベルガー指揮カメラータ・ザルツブルクによるモーツァルトの後期ピアノ協奏曲と交響曲全4回シリーズの3回目。協奏曲は「第22番」と「第24番」が取り上げられた。強弱や抑揚に細心に気配りした繊細で純度の高い小菅のソノが魅力的だった。「第22番」では、欲を言えば第2楽章に影の深さと翳りがさらさらと思われたいが、「第24番」は、非の打ちどころのない驚異的な名演だった。

バンベルク交響楽団

11月6日・サントリーホール ●ヘルベルト・フロムシュテット(指揮) ●ヒョートル・アンデルシエフスキ(p) ●モーツァルト「ピアノ協奏曲第17番」●ブルックナー「交響曲第4番」 ●若下真好

東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団(第283回)

11月16日・東京オペラシティ ●ピゼーニ「交響曲」ハ長調、フォーレ「レクイエム」Op.48 ●宮本文昭(指揮) ●幸田浩子(S)、河野克典(R)、東京シティ・フィル・コーア(合唱指揮) ●篠丸崇浩

サンフランシスコ交響楽団

11月10日・サントリーホール ●マイケル・ティルソン・トマス(指揮) ●コジャ・ワン(p) ●ラファエル・ヌーニャ「交響曲第7番」(川崎校訂版) ●若下真好

日本フィルハーモニー交響楽団(第645回)

11月9日・サントリーホール ●山田和樹(指揮) ●バスカル・ロジェ(p) ●野平一郎(クリエーター) ●フレリユード・ガッシュウィン「ピアノ協奏曲」 ●ヴァレーズ「チューニング・アップ」 ●ムソルグスキー「ストコフスキー編」 ●組曲「展覧会の絵」 ●山田和樹が日本フィルの正指揮者に就任した。これはその記念演奏会。昨年12月の共演でも感じたことだが、山田のバトン捌きは、この歳でこんなまでに後進はとうとうと、要らぬ心配をしなくなるほど巧い。ガッシュウィン「ピアノ協奏曲」が好例となる。シンコペーションの連続など、ある時は右手の棒で、ある時は左手で、ふつと、さつと、絶妙のタイミングで先取りしてみせる。バスカル・ロジェがピアノと格闘気味だっただけに、この力の抜け具合はよけいに印象的。オーケストラもそれに添えて小気味よく、この感度は、当夜一貫して保たれた。

東京フィルハーモニー交響楽団(第24回)

11月16日・サントリーホール ●三ツ橋敬子(指揮) ●ガブリエル・リプキンス「ストラヴィンスキー」組曲 ●「火の鳥」(1999年版) ●プロックナー「狂詩曲(シエロモ)」「ホ「ハフラスキー」(ラヴェル編)」「組曲「展覧会の絵」」 ●昨今注目を集めている指揮者、三ツ橋敬子を指揮台に迎えての定期は、ストラヴィンスキーの「火の鳥」が比喩的三ツ橋のアプローチが「王道」を行くもの。リプキンスの口も冴える。

東京交響楽団(第605回)

11月10日・サントリーホール ●飯森範純(指揮) ●ロデオ・ボコソフ(p) ●マーラー「ベリオ編」 ●若き日の歌」より、R・シュトラウス「家庭交響曲」Op.88 ●武満徹の2曲とワグナーという変わったプログラム。両者に共通項を求めれば、質がまったく異なるとはいえず、艶やかな官能性がある。武満の「遠い呼び声の彼方へ」と「スタルツ」は、前者において特に響きが面白い。独奏ファイオリング(堀正文)は柔らかな武満らしい響きだが、エド・デ・ワルトの指揮は武満に固有な官能性と柔らかな欠ける。その演奏は響きのアーティキュレーションがくっきりしており、音楽のうねりや起伏よりテクニミックの対照を明確に出したざりりとした武満となった。